

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

人をつなぐ技法としてのパフォーミング・アーツ：  
共生のためにできること

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-04-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 寺田, 吉孝 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15021/00009401">https://doi.org/10.15021/00009401</a>

# 人をつなぐ技法としての パフォーマンス・アーツ

— 共生のためにできること —

文 寺田吉孝

排他的な考え方が台頭している現在の世界では、属性や信条などの異なる人々の共生は決して達成されることのない絵空事のように感じられるかもしれない。人々はさまざまな要因で分断され、異文化への寛容さが失われ、他者への憎しみや恐怖感が増大している。多文化共生が、さまざまな問題を含みながらも、多くの国家や地域の達成目標に掲げられ、世界は共生に向けた大きな流れの中にあると感じられたのは、つい最近のことだったが、そのような志向がいつも簡単に覆されつつある。これまでに、共生に関する研究や取り組みは数多く実践され一定の成果を収めてきたが、そのような努力が、分断の大きなうねりにのみ込まれようになっている。

このような現状を鑑みれば、人と人、集団と集団の新たなつながりを模索し、背景や考えの異なる個人、集団の共生のかたちを再想像することはきわめて現代的な、喫緊の課題の1つであると考えられる。そこで、2018年度から私が代表となって開始した国立民族学博物館の特別研究「パフォーマンス・アーツと積極的共



ダリットの太鼓タップを演奏するムットゥラムのメンバーたち(2018年、チェンナイ、ゴーパーラン・ラヴィンドラン提供)。

生」では、これまでの共生に関する研究で比較的軽視されてきたパフォーマンス・アーツに焦点を当て、共生を達成するうえで果たしうる役割を同定し、その糸口を具体的に示すことを目的としている。

ここでいうパフォーマンス・アーツとは、音楽、舞踊、芸能、演劇はもとより博物館・美術館における体験型インスタレーションなどを含む、身体を基盤とする幅広い活動を指す。元来、パフォーマンス・アーツは、身体を媒体とし、視覚中心的な認識体系とは異なる人間の知覚や思考体系に作用すると考えられ、人間の感情に大きな影響を与えることが報告されてきた。しかし、その一方で、パフォーマンス・アーツのもつ感情に作用する力が、偏狭な国家主義、民族主義、性差別主義などを助長、維持するために利用されてきたこともまた事実である。いいかえれば、パフォーマンス・アーツは人々を結びつける可能性をもつ反面、分断したり傷つけたりするためにも利用されてきたのである(Urbain 2008; O'Connell and Castelo-Branco 2010)。そうであるならば、パフォーマンス・アーツは、本源的に特定の方向性をもつ効果を生むわけではなく、一定の条件のもとで、肯定的な効果を生む可能性を秘めていると考えるべきであろう。このことから、本研究では、パフォーマンス・アーツが共生社会の達成に寄与する枠組みや条件を、具体的な事例を蓄積し比較検討することから探ってみたいと考えている。その過程で、国内外の研究機関やNGOなどと連携をはかり、当該テーマの研究を深め、2019年度に国際シンポジウムを開催し、その成果を国際的に共有することを目的としてゆきたい。

## 共生のかたち

共生にはさまざまな定義があるが、本研究では「消極的共生」と「積極的共生」を区別することにする。消極的共生とは、集団間に可視的な差別はみられなくとも、他集団について忌避感や偏見が根強く残り、きっかけがあれば物理的な差別や暴力につながる温床となっている共生の形態である。目に見える差別は、立法や行政の施策によってかなりの部分解消できることは、これまでに実施された是正措置の成果からも窺うことができる。しかし、このような措置は時として逆差別

の感情を生み、さらなる差別につながる場合も多い。これに対し、積極的共生とは、お互いの文化的特性・差異を認めるだけでなく、多様な背景をもつ個人や集団と共に同時代を生きること、多様な文化を享受することを肯定的にとらえ、積極的に求める姿勢である。他に選択肢がないという理由で仕方なく生活の場や社会を共有するのではなく、共に「今ここ」を分かち合うことに充足感や喜びを見いだす状態といってもよい。本研究では、積極的な共生を実現するためにパフォーマンス・アーツが果たしうる役割があるという前提に基づいて、その可能性を探りたい。

## 分断される人々

人間の集団は、その規模や地域にかかわらず、民族、宗教、言語、政治的信条、経済階層、年齢、ジェンダー、セクシュアリティなどさまざまな指標(徴)により区別されており、そのように区別される集団間には、力の不均衡が存在することが多い。この中で劣位におかれた集団(マイノリティ)の文化や歴史は、マジョリティ集団による文化表象や教育から排除されたり、矮小化、看過されたりする傾向がある。そのため、自分たちの正当な位置づけや居場所を探る手段としてマイノリティが音楽や芸能に自己表現や主張の場を求める例が数多くみられる。周縁化された集団の多くは、国家や地域の発展のために多くの犠牲を払ってきたにもかかわらず、その貢献が公的に認められず、彼らがあたたかも存在しなかったかのような歴史の叙述や表象に苦しめられてきた。

こうした主流社会における差別的待遇に抗うために、彼らは政治団体を結成し待遇改善に向けた運動を展開してきた。主流社会の暴力から身を守るために武装集団を結成することもある。このようなマイノリティ集団による運動は可視的な差別の軽減には一定の成果をあげてきたが、差別に対する闘争は、マジョリティー・マイノリティ間の亀裂や偏見をいっそう深めるだけでなく、マイノリティ集団内の分断を生む結果を伴うこともあった。

自己表現をするための公的手段へのアクセスが制限される中、パフォーマンス・アーツに可能性を見いだすマイノリティ集団もある。そのような活動に関する

事例報告は少なくないが、パフォーミング・アーツと共生の関係をテーマにした研究は比較的少なく、また研究の対象地域も限定的である。本研究では、マイノリティの表現、主張としてのパフォーミング・アーツの研究に則りつつも、その先にある共生社会を見据えたパフォーミング・アーツの実践に注目したい。

### パフォーミング・アーツと共生の実践例

共生を目指してパフォーミング・アーツを活用する試みは、世界各地で行われてきた。そのような取組みの中から現在進められている事例を2つ挙げてみたい。

#### 事例1-南インドのダリットの太鼓

南インド、タミル・ナードゥ州の州都チェンナイでパフォーミング・アーツを利用した共生への取組みが10年ほど前から行われている。太鼓の演奏や演劇を通じてカースト間の垣根を取り除くことを目的とするプロジェクトである。この取組みを2009年に立ち上げ推進してきたマドラス大学教授のゴーパーラン・ラヴィンドラン(ジャーナリズム・コミュニケーション学部長)は、社会問題に正面から取組む稀有な大学人の1人であり、その行動力と勇気ある姿勢には学ぶ点が多い。

インドのカースト制の最下層に位置づけられている人々はダリット(不可触民)と呼ばれ、行政による是正政策にもかかわらず(または、それに対する反発のために)、いまだに厳しい差別や暴力に晒されている。周縁化された人々が抵抗の手段として音楽・芸能を選ぶことが世界各地で報告されているように、ダリットの人



タッパータムの練習をするダリットの若者たち(2009年、ボンネーリ、寺田吉孝撮影)。



ダリットの太鼓タップ。2本の太さの違う木製スティックで打つ。打面は牛の皮を使う(2001年、タンジャーヴール、寺田吉孝撮影)。

たちも、不浄視されてきた太鼓の演奏に、踊りのステップを取り入れて、「タッパータム」という新しい音楽舞踊ジャンルを創り上げた。そもそも、葬送の行列を先導して叩く片面太鼓タップ(またはパライ)は、死との関連から不浄視され、それを演奏するダリットも疎外され、差別されてきた。タッパータム(パライアーツタム)という名称は、片面太鼓(タップ、パライ)を踊り(アーツタム)ながら打つ芸態に由来する。

この太鼓を用いた新しい音楽舞踊ジャンルは、ダリット解放の政治運動と結びつきながら人気を博し、現在では数百ものグループが存在するという。その激しい音や踊りの動きだけでなく、太鼓の形や演奏者の姿は運動の視覚的なシンボルとなっている。また、当初、カースト差別への抵抗として生まれたこのジャンルでは、男性しか演奏しなかった太鼓を女性が演じることで、女性の解放や地位の向上につなげる努力も行われている。このような音楽を媒介とした差別反対運動は、ダリット・コミュニティにおける自らの意識向上と外

部社会への働きかけの手段として実践されてきた。

ラヴィンドランは、ダリットの学生の中にタップの演奏家がいることを知り、学内に非公式の音楽グループを立ち上げることを考えた。そのグループに中庭を意味する「ムットウラム」という名前をつけたのは、南インドの伝統的な家屋では中庭がさまざまなコミュニケーションが行われる場所であったからである。ダリットの学生だけではなく、カースト帰属の異なる学生をメンバーに加えて共に練習し、学内外で演奏活動を展開している (Ravindran 2018)。

ある高位カースト(ブラーマン)の学生は、ムットウラムのメンバーになり、練習のために使っている太鼓を自宅に持ち帰ろうとしたところ、両親は不浄な太鼓を家に持ち込むことに激怒し許さなかった。代々不浄視してきた太鼓を娘がダリットの学生から習っているだけでも不満であるのに、自分たちの生活空間にまで持ち込もうとしたことに対する怒りだった。しかし、彼女の熱意に影響されるだけでなく、グループの演奏を体験するにつれて、それまで自明だった自己の嫌悪感をしだいに客観的にとらえるようになり、最後には太鼓の持ち込みを許すようになった。このような意識の変化は、保守的なブラーマン家庭では画期的な変革であるといえる。

現在、ムットウラムは、より大きい社会的インパクトを目指して、活動の範囲を学外に広げている。チェンナイ市内のマイラープールは保守的なブラーマンが集住する地域として知られているが、そこで毎年開かれる地域の文化祭に3年連続して出演した。このような場でダリットの音楽芸能が披露されることは異例であり、一部の住民から苦情が出ているために出場を控えてほしいという依頼があったという。それでも、彼らの演奏に興味を示す高位カーストの人々は予想外に多く、自らも太鼓の演奏を学びたいという若者や、ムットウラムの活動に寄付を申し出た高齢女性もいた。このような住民の反応から判断しても、ムットウラムの活動が、人々の意識を少しずつ変えていることがわかる。いまだに、原理主義的な考えをもつ少数の者たちがムットウラムの上演に反対しているが、それまでカーストによって分離されていた空間で、このような演奏を継続的に行い、既成事実を積み重ねながら変化の基



警察がダリットの家政婦を殺害したという実話に基づく劇を演じるムットウラムのメンバーたち(2018年、チェンナイ、コーバーラン・ラヴィンドラン提供)。

盤を作ることの重要性をこの事例は教えてくれる。

## 事例2-大阪の被差別部落と太鼓

つぎに、私自身がかかわるプロジェクトを紹介したい。大阪市浪速区の被差別部落は皮革産業で知られ、とくに太鼓の製造が盛んであり、300年以上にわたり西日本全域を対象に太鼓の製作、皮の張り替えをおこなってきた「日本一の太鼓の町」を自負する有数の太鼓生産地である。太鼓の打面には牛の皮を張るため、太鼓作りはこの地域の産業の1つとして継承されてきた。1980年代以降の太鼓ブームの流れのなかで、海外ツアーを行うプロの太鼓集団がマスコミでも大きく取り上げられ、国際的に評価される太鼓打ちも現れるようになったが、その一方で太鼓文化を支える職人たちの役割や貢献はじゅうぶんに認知されず、被差別部落出身者であることから差別や偏見の対象となってきた。

1987年、浪速区にある被差別部落の青年たちが和太鼓集団「怒」を結成した背景には、職人たちの貢献を社会に広く認知してもらいたいという強い思いがあっ

た。この演奏グループは、公演前にグループ結成の経緯を説明することで出自を明かし、有無を言わさぬ圧倒的なパフォーマンスで、コミュニティの存在を外に知らしめることを戦略として活動を続けてきた。設立メンバーの1人である佐藤謙一が「度肝を抜くような実力があれば、余計な喧嘩をしなくていい」と言うように、メンバーたちは、自分たちの演奏によって聴衆や舞台関係者たちの態度が大きく変わることを経験的に学んできた。

太鼓の演奏が感情に作用する例として、グループ内で語り継がれている1つの事件がある。太鼓職人の息子との結婚に断固反対していた相手女性の父親が、「怒」の演奏を聴いた翌日に、結婚を許可したというエピソードだ(浅居 2002)。この1例だけでは、太鼓が感情を突き動かす「力」をもつことの例証にはならないが、このような心情の変化がパフォーマンス・アーツの体験で引き出されうるという事実は軽視すべきではない。さらに、同様の反応が得られなかった「失敗例」も検証することで、太鼓の演奏のもつ可能性についてより深い理解が得られるだろう。

周縁化された集団や個人が、主流社会の目にみえない圧迫から逃れる居場所を確保し、主流社会の文化的な押しつけに抗う手段としてパフォーマンス・アーツにかかわる事例は数多く報告されている。被差別部落における太鼓の活動にもそのような側面があるが、ここでは、パフォーマンス・アーツがコミュニティ内で

Rights were not granted to include this image in electronic media. Please refer to the printed journal.

被差別部落の太鼓集団6チームが共同で開催した公演「鼓色祭響」(1999年、大阪、和太鼓集団「怒」提供)。

の共生の達成に貢献する可能性にも注目したい。

第1は、世代をつなぐ可能性である。戦争やジェノサイドなどを経験した人々が、自身の過酷な体験を次世代に語らない傾向があることは周知の事実である。被差別部落出身者もその例外でなく、現在を生きる若者たちは、親や祖父母たちから、彼らの差別体験について直接話を聞くことは稀である。過去の苦しみや悲しみを話すことは精神的に辛いことであり、また話しても理解されないと感じる場合も多い。しかし、「語らない」年配者の悲しみは消えたわけではなく、かれらの記憶の中に沈殿している。

コミュニティ内の年配者が「怒」のメンバーにかけ感謝や激励の声、無言で演奏を見に来る姿から、太鼓打ちたちはコミュニティの経験を慮り、勇気づけられ、自分たちの活動に新しい意味を見いだす契機となっている。それは声に出しあって確認し合うような理解や認知ではなく、コミュニティのつながりや自分の位置を確認する暗黙の了解である。

第2は、コミュニティ内の分断を克服する可能性についてである。被差別部落の負の遺産としてコミュニティ内での競合や反目が存在し、成員間の協働を妨げている場合がある。多くの太鼓集団が解放同盟の支部の文化活動として開始されたという経緯があるため、



第11回イギリス太鼓フェスティバルに参加した太鼓集団「絆」(2015年、エクセター、徐善美提供)。

太鼓の打ち手の自由な往来や協働は同じ被差別部落であっても容易ではなかった。このような分断を改善するために、「怒」が各地域の太鼓グループに声をかけ、1999年に共同公演を成功させた。この協働がきっかけとなり、6つの太鼓グループのメンバーで構成される、地域を越えた太鼓集団が結成され、大阪府下の被差別部落全体を代表する活動を展開している。被差別部落内に長く存在してきた地域間の壁を越えて、より緩やかに連携できるコミュニティの形成が、パフォーマンス・アーツを媒介として始まっている。パフォーマンス・アーツは、主流社会との共生に向けた活動であるだけでなく、コミュニティ内の分断を克服する可能性をも秘めているのである。

### 共生の可能性をさぐるさまざまな試み

こうしたパフォーマンス・アーツのつながりを作り出す活動は、現在、より多様なかたちで始まっている。これまでみた事例は、演奏者と聞き手がある程度明確に分かれている(聞き手の存在が想定されている)場合であるが、共に音楽を創る営為そのものに共生の可能性を探るアプローチも試行されている。たとえば、九州大学の中村美亜は、ジェンダー・セクシュアリティ研究と音楽学の境界領域で研究を進めてきたが、ここ数年は「共創」をキーワードにして、アートを媒介として人を「ゆるやかにつなぐ」ためのさまざまな取組みについて研究している。音を使ったプロジェクトでは、規範(到達目標)としての音楽は存在せず、即興に重きがおかれる。音のイメージが最初から決められていて、その目標に近づけるために努力するのではなく、参加者は共演者たちが奏でる音に反応しながら共に音を創っていく。その際、通常修正すべき失敗とみられる音のズレは、逆に奨励される。このような共創により、他者と繋がりをもつことに困難を感じる人々が、パフォーマンス・アーツを通して他者とかわり、交わる契機に成りうるという(中村2018)。しかし、このような共創を実現するには、その枠組みを作るファシリテーターの存在が必要であり、汎用性をもつプログラムとして定着させるには、かれらの養成も必要である。

世界各地で実践されている共生に向けての活動は、

ローカルな状況に合わせて実践されているため、その理念や方向性から規模や形態、企画者や参加者の背景にいたるまで大きく異なっている。多くは、被差別部落の太鼓の事例のように、コミュニティが自ら立ち上げた活動だが、移民の音楽をカリキュラムに取り入れ民族間の関係を改善したノルウェーの学校音楽教育の場合のように、公的機関が活動を推進している場合もある。また、アムステルダムに本拠をおく「国境なき音楽家たち」のように、集団間のコンフリクトを解決するための音楽の活用法をグローバルに共有する活動を、世界各地で展開する団体まで存在する。

いずれの場合も、先に述べた楽器職人の息子の逸話のように、パフォーマンス・アーツが、一瞬にして劇的な変化を生むことは極めて稀である。しかし、稀であっても、そのような変化が生まれうる点に共生の可能性を託したい。また、継続的に活動していくことによって、上記のブラーマン夫妻の事例にみられるように、時間をかけて人間の感情に作用する場合もある。

このようなパフォーマンス・アーツがもつ特質をより深く理解し、その可能性を探るため、本研究は世界各地に関連するプロジェクトを展開する研究者や活動家の参加をつのり、パフォーマンス・アーツを「積極的な共生」の実現に向けた具体的な方策としてとらえる総合的な研究を目指している。

### 【参考文献】

- 浅居明彦 2002 「太鼓集団『怒』と文化活動」『浪速部落の歴史』編纂委員会編『太鼓・皮革の町——浪速部落の300年』pp. 185-203, 大阪：解放出版社。
- 中村美亜 2018 「共創する音楽——多様な人たちの共生のかたち」みんなく公開講演会『音楽から考える共生社会』東京日経ホール, 11月2日。
- O' Connell, John Morgan and Salwa El-Shawan Castelo-Branco (eds.) 2010 *Music and Conflict*. Urbana: University of Illinois Press.
- Ravindran, Gopalan 2018 Human Rights and Contemporary Indian Journalism: Towards a 'Journalism for People'. *Human Rights Education in Asia-Pacific* 8: 181-196.
- Urbain, Olivier (ed.) 2008 *Music and Conflict Transformation: Harmonies and Dissonances in Geopolitics*. London: I. B. Tauris.

### てらだ よしたか

国立民族学博物館学術資源研究開発センター教授。マイノリティ集団の音楽文化に関する映像番組の制作に関わりながら、音楽研究における映像音響メディアの可能性を検討している。編著書に *Ethnomusicology and Audiovisual Communication* (2016年)、制作番組に『アリアン峠を越えていく——在日コリアンの音楽』(2018年)、『怒——大阪浪速の太鼓集団』(2010年)など。